

大学病院の臨床看護の場における研究について

奈良県立医科大学附属病院

看護部長 佐伯 恵子

臨床看護の場における看護研究では、どのようなテーマで追究されることが望ましいのだろうか！？について、最近思ったことを述べてみようと思います。新人教育も必要だろう、管理的なことも必要だろう、学生教育も…しかし、臨床看護師が一番力を入れているのは、病院で治療を受けている患者へのケアであるので、そこにこそ、テーマを見出すべきではないだろうか。

2010年の秋は、首相選挙候補者の演説趣旨を新聞TVなどで見る機会が多くありました。そこで、「国民の生活が第一」というテーゼを見て、思い出したのは、1970年代の看護界で主張された「患者中心の看護」でした。この主張が当時の看護師に投げかけた意味を考えますと、第一は、病者を、病気や病態に重きをおいて見てきた反省的態度から、「病む人」としてとらえることを強調する転換点であったことです。医師やその他の医療専門職とのちがいを明確にすることをめざして、アメリカ看護婦協会（ANA）は、1980年に、「看護：ソーシャル・ポリシー・ステートメント」を発表し、看護を「実際のまたは潜在的な健康問題に対する人間の反応を診断し治療すること」と定義しました。これを契機に、看護アセスメントでは、病名や症状ではなく、それらがその人の健康な生活にどのような影響を及ぼしているのかが述べられることを求めるようになったのです。けれど、実際の臨床看護の現場では、患者の入院期間の短縮や、常に新しい看護者を受け入れ、教育していかなければならないジレンマなどより、看護師のアセスメント能力が高まらないという課題に直面しています。困難な状況ではありますが、しかし、大学病院では、病名を同じくする病気で治療を受ける患者が多く入院されています。それを活かし、専門看護師や認定看護師の協力を得て、各部署で治療をうける病者の反応の特徴をふまえたケアを研究テーマとしてほしい。臨床看護の場における看護研究のテーマは、そのケアの継続のなかで見出してほしい。

「患者中心の看護」が投げかけた意味の第二は、「患者」を中心において、医療者が協働するチーム医療が登場してきたことです。医療チームの構成メンバーは、ながらく、医師と看護師だけでしたが、1960年代中ごろより国家資格を有する理学療法士や作業療法士が誕生してくる中で、医療の多職種メンバーによるチーム医療が模索されるようになったのです。他の専門職種たちも、「健康な生活を支援する」ことを中心にかかっています。そして、医療者各々の専門学会が独自に開催される一方、多職種メンバーが会員である学際的な学会が並行的に開催されています。特に大学病院で勤務する医療者たちの多くは、看護者を含め、独自の学会だけに参加するのではなく、多職種とも学会で積極的に交流しており、そこで得られた知見が、実際の医療現場では、役立っていることが多いとも感じています。そういう意味で、チーム医療における模索の実態とその効果が看護研究の題材となっていく必要があると思います。看護職者が専門職者として、多職種たちと協働し、自律的に活動するためにも、研究における医療職者との協働を望んでいます。